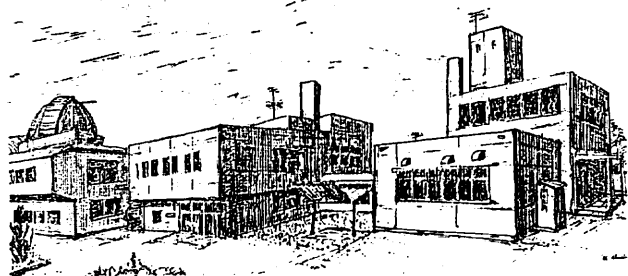


# 教育センターだより

第27号 (昭和56年6月)



## “想”

あれは、今から何年前のことだったろうか。10年以上にもなろう。

教育センターの肝いりで複式国語の友を作った。その3・4年の単元に「気持ちを考えながら読もう」というのがあった。こういう単元を複式で扱うのは閉口ものである。われわれは、あれこれ論議の末、その第4時の間接に「21ページと25ページのさし絵の間に、もう1枚のさし絵を入れるとしたらどんな絵を入れたらよいでしょうか」と問うことにした。

気持ちを考えながら読む、その読むを文字から離陸させたのである。国語は字だけ、そんな考えを追放したのである。

研究とか研修でも同じではあるまいか。

私は、ある郷土史をまとめる仕事にかかわって十年近くなる。休みや夜の仕事であるから、はかどらないことおびたしい。

そのうえ、私達は方法論のうえであやまちをおかしていた。初め、私達は、第1編第1章第1節と整然たる項目を並べ、どこにも通用しだれもが納得するわく組みをした。これらのカテゴリーに属する資料を集めて、過不足のない叙述を進めようとした。そして、この方法のまちがいであることに気づくに、たいした時間を要しなかった。

たとえば、民謡という項目がある。土地で歌われている「ドンズキウタ」とか「カラメブシ」を並べて、はて?と思った。秋田は民謡の宝庫と称する。青森・

## 目次

巻頭言 “想”	1
研修・研究の抱負と構想	2
刊行物予告 (本年度の刊行物から)	3
昭和56年度研修員の紹介	4
教育研究法委員会の活動とその展望 — 昭和55年度から56年度へ —	5
県内教育研究機関協議会の活動方針	5
告知板 ～新しい機構と陣容で～	6

## 所長 荒谷 浩

福島・沖縄・熊本と比べてどうなのか。オバコやジंकは、南部と庄内を通うバクロウの持ち運んで途中落としたヌカゴではないか。

私たちは、カテゴリーにあてはめることが学問だと思ふことをやめた。収集したもので新しい体系を作るのが科学だったと、まことにあたりまえの方法にたどりついたのである。

たとえ、文化科学であっても、研究室の机の上で考えている研究、一步進めて実験室で検証した研究もそこにとどまっているかぎり十分でないのではないか。あえてだれかのお先棒をかつぐわけではないが、野に出、まちを歩き回わり、生きている子どもをみつめてそこからいとぐちをたぐるべきではないか。

創作で一番苦しむのは、修辞でも文飾でもない。それは、発想であり、構想である。われわれは、豊かな想をねるために、一見むだなようないとなみを十分熟するまで続けるべきではないか。

豊かな人間とは何か。情緒的世界だけだと思ったら大まちがいである。

それは、飛躍する発想・常識をこえた着想・異端の思いつきなどを含む。多様な選択肢とやわらかい脳みそを持つ人間を言うのではあるまいか。

わが教育センターは、かかる“想”の豊庫であらねばならぬ。かび臭き定型律を排さねばならぬ。きまり文句の学術語におぼれてはならぬ、と新入りの私は、思うのである。

## 研 修 ・ 研 究 の 抱 負 と 構 想

### ゆとりある充実した学校生活を 実現するための学校を求めて

#### 経営研究室

教育課程基準改善の趣旨を再確認しながら、それを教育経営に生かす各学校の主體的な取り組みがみられる。当室で担当する学校経営、学年・学級経営、学校評価等の研修講座では、全県的な、このような動向を基盤に、より望ましい方向をさぐり、改善の方策について研修する。

新規採用教員を対象とする教職教養研修講座は、校種別にし、前・後期を通じて、教職についての基本的な内容をじっくり研修するよう計画している。

また、経験五年後の教員を対象とする教育方法研修講座は、学級経営、生徒指導、学習指導、教育評価等の分野をセットし、テキストをもとにしながら、演習の機会を取り入れ、より専門的な研修を積むよう計画している。

学校経営についても、新任教頭、教務主任、学年主任の職務上の問題点が解明できるような研修になっている。

さらに事務職員も新規採用者と一般職員に分け、その経験に適合した専門知識及び技術が研修できるようにしている。

学校評価については、評価方法や今日の課題を研修するようにしている。

なお「学校経営の改善に関する研究」の一貫として本年度は、教頭職の組織及び運営について具体的に明らかにしていきたい。

### 教科の特色を生かした研修・研究の充実を

#### 教科研究室

新学習指導要領の趣旨に即応した学習指導の実践化を志向する講座運営と学習指導の改善につらなる研究を推進していきたい。講座の形態にも変化とゆとりをもたせ、提供する教材・資料等にも工夫を重ねて、受講者の研修に奉仕をしていきたい。

当室では、国語（毛筆書写）、社会、算数・数学、音楽、図工・美術、英語の六教科とへき地教育の研修研究を担当しているが、それぞれの教科の特性と個性を生かした研修・研究となるよう留意していきたい。

国語、社会、算数・数学では、教科学習指導理論、教材研究、授業研究を主軸にした講座内容の刷新を図

りたい。音楽、図工・美術では、表現活動を重視する方向で、授業に結びつく基礎的な技法・技能を深め高める実技研修にウエイトを置いていきたい。また、英語では、年度当初にL・Lの機器設備が更新されることと、外人講師の効率的な配置によって、口頭運用力の向上を研修の重点としていきたい。

へき地教育に関する研究面では、複式学習指導資料「小学校複式学級の学習指導 理科編」の作成に意欲的に取り組んでおり、関係者には三学期早々に配布されるよう研究日程を配慮している。

また、郷土教育の振興に役立てるため、二か年間研究を継続してきた郷土教育資料作成事業が完結し、秋田のわらべうた・民謡を教材化した音楽編は、未開拓なこの分野では、好個の資料となるであろう。

### 個を生かす、教授＝学習システムの開発へ

#### 教育工学研究室

教育工学研究室開設以来、一貫した研究の基本は、人間尊重教育の推進であり、そのための教授＝学習システムの構築である。

本年度は、加藤尚、齋藤善博両研究員の研究のまとめの年であり、両研究員とも、学習者に重点を置いた学習指導、特に、学習者自ら学習情報を選択、活用していく学習システムの研究に取り組んできており、明年2月に、それぞれ研究成果の発表を行なう予定である。

また、本年度の研修員として、県立六郷高等学校から高橋昭治教諭、湯沢市立湯沢北中学校から平元誠教諭が入室、それぞれ学校現場における今日の問題の解明をテーマに取り組み、その成果は研修集録第13集に発表される予定である。

研修講座関係では、講座内容充実のため開催期間を1日増とし、また教育機器教材制作研修講座は、受講者を増員し、2回制とした。いずれの講座も終了時には、研修内容の完全習得を図ることをモットーに、本年度も行動化のできる講座内容の編成に、努力を続けている。

奉仕活動の面では、学習指導法改善の具体的な研修を求めて、県内各地からの随時研修が今年も多いようである。ひとりひとりの学習者に、意欲と自信をもたせ、生涯学び続け得る確かな学力を習得させるためのシステム研究に、研究室の意気一段と高まっている。

### 児童・生徒の発達に即し、より直接経験を重視する理科学習をめざして

理科研究室

#### ○ 研修講座について

〈小学校〉 低学年理科Ⅰ・Ⅱ、中・高学年理科Ⅰ～Ⅳ、理科経営Ⅰ・Ⅱの各講座を行い、学年の発達段階に即した理科学習の進め方や観察・実験法並びに理科経営の在り方等について検討してみたい。

〈中学校〉 理科教育講座Ⅰ・Ⅱを行い、学習指導要領の改訂の趣旨を生かした学習の進め方や新しい観察・実験法について検討してみたい。

〈高等学校〉 理科教育（本年度は物理と生物）、理科Ⅰ（物理、化学、生物、地学の各領域）の各講座を行い、新学習指導要領の完全実施に備えたい。

更に、野外観察Ⅰ～Ⅲ、天体観測Ⅰ・Ⅱ、教材製作Ⅰ～Ⅲの各講座を行い、より直接経験を重視する理科学習の実現に備えるようにしたい。

#### ○ 研究事業について

今回の学習指導要領の改訂によって、高等学校に必修科目として新設されることになった理科Ⅰにおける主な観察・実験法を「理科Ⅰ実験観察カード」にまとめ、各高等学校に配布できるように研究を進めている。

また、本年度から3年計画で理科学習の手引き書として「野外観察指導の手引き（動物編）」を作成するために研究を進めている。

全県児童・生徒理科研究発表大会（第16回）を11月11日（小学校）、12日（中学校）、13日（高等学校）に開催するが、昨年以上の充実発展を期待している。

### 新しい題材の方向を目指して

技術家庭研究室

本年度の実技研修講座は、新学習指導要領完全実施をふまえ、より充実した学習指導ができるよう内容を工夫している。特に題材の開発については、選択の題材も含めて、各領域とも積極的に取り組み、試作を続けている。また、相互乗入れ時の題材についても、試作したものの妥当性を検討しているため、講座を通じて受講者から意見を伺いたいと考えている。さらに、学習効率を高めるための指導資料の作成に重点を置き、講座資料もこの視点から整えていきたい。

教材研修講座（希望講座）は、教材・教具の製作を中心としているが、木材加工では、相互乗入れ時の題材を工夫製作しており、住居でも相互乗入れを考慮した講座内容になっている。男女共に受講できるので、奮って参加していただきたい。

小学校家庭科並びに高校家庭科に関する講座は、担当教員の指導力の向上をねらいながら、学習に直接役立つ教具・資料の作成を主な内容にしている。

所員の研究も新しい題材の方向を目指し、本年度は「ICを利用した題材例」（仮題）というテーマで椎名指導主事が研究発表をする予定である。

本年は小松玲子（食物担当）、倉泉喜久雄（機械・金属加工担当）、中山翠（被服担当）各指導主事の着任で、室員も大幅に変わり、新鮮で創意にみちた気持で講座に取り組み、意欲的に研究を進めていることをご紹介したい。

## 本 年 度 の 刊 行 物 か ら

### 秋田県郷土教育資料 — 音楽編 —

本書は学習指導要領に示されている「郷土の音楽」の学習に役立つとともに、ひろく郷土教育振興の一助として作成するものである。

本書の内容は、県内のわらべうた・民謡の解説と楽譜を収録し、それを素材とした編曲（合唱・器楽合奏など）をも収録していく。

わらべうたは53曲を収録し、それを「あそび・年中行事・動植物・天体気象・子守・口あそびうた」に分類し、そのなかからおよそ20曲を素材として、教材化をねらって編曲し、収録する。また、民謡については25曲を収録し、「祝い・野山稼ぎ・酒盛・放牧・盆踊りのうた」などに分類し、わらべうたと同様に、5曲を編曲し収録する予定である。

### 小学校複式学級の学習指導 — 理科編 —

本県の複式学級の実情をふまえ、新しい理科指導のあり方をめざして、

次の様な内容のものを作成することになっている。

- I 複式学級における学習指導
- II 理科における学習指導
- III 複式学級における理科学習指導上の留意点
- IV 理科年間学習指導計画例
- V 理科学習指導の展開例
- VI 複式教育の用語

作成委員には現場の経験豊富な教員を委嘱し、研究を進め、1月刊行を目指している。

これで、国語、算数、社会の各編に続き、小学校の複式学級学習指導資料が4教科について作成されることとなる。

## 昭和56年度研修員の紹介

本年度の研修員は、小学校教諭4名、中学校教諭8名、高校教諭4名の計16名（特殊教育センター2名を含む）である。5月1日より9月30日までの5ヶ月が研修期間であるが、この間所員同様に勤務して、指定された教科・領域に基づいた「分担研修」や、研修講座に参加したり所外の施設を見学する「共通研修」を行うことになっている。すでに分担研修のテーマが決定し、テーマに即した研修が進められている。7月には経過報告会が持たれ、9月には研修のまとめがなされ、その論文は「研修集録第13集」に収載、刊行される。設定されたテーマは、次のとおりである。



### （経営研究室）

- 秋田市立築山小学校 教諭 大山 秀 二  
望ましい学習集団づくりと学級経営  
— 複数担任によるグループ指導を通して —
- 鹿角市立花輪第一中学校 教諭 石 井 勲  
望ましい学習集団づくりと学級経営  
— 学級会活動を通して —

### （教科研究室）

- 阿仁町立阿仁合小学校 教諭 金 新佐久  
小学校音楽学習における確かな表現力を育てる指導  
— たて笛の指導を中心に —
- 雄勝町立雄勝中学校 教諭 菅 感一郎  
歴史的分野における郷土資料の効果的な活用
- 秋田県立花輪高等学校 教諭 川 村 才 二  
英語学習におけるLLの効果的活用について

### （教育工学研究室）

- 湯沢市立湯沢北中学校 教諭 平 元 誠  
教育機器を取り入れた体育学習の指導法の検討  
— とび箱運動（個人的スポーツ）における  
ビデオの効果的活用について —
- 秋田県立六郷高等学校 教諭 高 橋 昭 治  
生徒の主体的学習活動を中心とした授業システムの  
研究  
— フィードバックを取り入れた学習活動計画の  
作成と活用について —

### （理科研究室）

- 能代市立浄城第三小学校 教諭 三 輪 尚 男

### 昆虫教材についての一考察

— カイコの成長調節を中心にして —

- 大雄村立田村小学校 教諭 狩 野 健 一  
少人数学級において集団思考を深めるための理科学  
習の指導について  
— 小学校4年の製作活動学習を中心に —
- 大内町立下川大内中学校 教諭 佐 藤 栄 子  
イオン概念形成についての一考察
- 秋田県立大館鳳鳴高等学校 教諭 佐々木芳美  
地史の指導資料作成  
— 有孔虫化石を中心にして —

### （技術家庭研究室）

- 能代市立鶴形中学校 教諭 板 倉 精 五  
金属加工に関する指導資料の作成  
— 接合を中心に —
- 秋田市立秋田北中学校 教諭 塩 沢 敬  
パジャマの製作学習に関する一考察  
— そで付け、えり付けを中心にして —
- 田沢湖町立生保内中学校 教諭 小 松 敬 司  
フラッシュ板を用いた題材例の試作

### 特殊教育センター関係

- 天王町立天王中学校 教諭 石 井 茂 雄  
学校における非行対策についての一考察  
— 生徒と教師の人間関係の改善をめざして —
- 秋田県立秋田養護学校 教諭 小 野 浩 裕  
精神発達遅滞をとまなう肢体不自由児の問題行動に  
ついて  
— 思春期特有の問題を持つ子ども —

## 教育研究法委員会の活動とその展望

— 昭和55年度から56年度へ —

昭和55年度から3か年計画でとりくんでいる「教育評価」についての研究は、学校と教育センターがタイアップしながら進めている。

ねらいとして、正しい児童・生徒の発達に応じた教育評価を見いだしたい。

### 1. 調査内容

- (1) 教育評価について
- (2) 授業前の評価立案について
- (3) 授業中の評価について
- (4) 授業後の評価と指導について
- (5) 学級経営・特別活動について
- (6) 指導要録、行動、性格、成績通知表について
- (7) 指導や評価についての悩み、要望等について

昨年度は上記の教育評価に関する意識調査を県内小・中・高等学校教員を対象にして実施した。上記の内容を26項目に細分して調査を実施したのであるが、その基礎集計をもとにして、分析研究したい。

### 2. 調査結果の分析と観点

- (1) 小学校・中学校・高等学校の学級担任の一般的な傾向について
- (2) 各選択肢間の反応について

(3) 年代別の反応と相違

(4) 特異反応、その他

### 3. 今後のこと

指導と評価・目標と評価は表裏一体のものといわれているが、学校ではどんなとりあげ方をすればよいのかを考察したい。

授業に臨む場合でも、どのような学習結果を想定し評価すればよいのか、又、授業中や授業後における評価の実施方法等を研究したい。

学級担任は自分の教育観に基づいて策定した教育計画といえる学級経営案に対して、基本的な評価の考え方とその必要性にかかわる問題等究明しなければならない。できるだけ小・中・高等学校の学級経営に対する考え方を明確にしたい。

特別活動が人間形成に果たす役割は教科と異なり、集団活動を通して人間形成の過程の評価をどう考えるかが大切なことである。

又、指導要録、行動や性格、成績通知表のあつかい方等にもふれ、「教育評価調査の結果報告書」を作成し、実証的な事例研究に向かって研究を進めていきたい。

## 県内教育研究機関協議会の活動方針

県内教育研究機関協議会には、県内14市町村にそれぞれの地域教育のセンターとして、教育に関する調査、研究、研修を通し、地域教育の向上を図るための教育研究所・教育センター・理科教育センターが加盟している。

本協議会の昭和56年度総会は、去る4月30日、県教育センターで開催され、本年度の役員が次のように選出された。

- |      |                             |
|------|-----------------------------|
| 会 長  | 荒谷 浩 (県教育センター所長)            |
| 常任幹事 | 洪谷孝一郎 (同 教育研究部長)            |
|      | 同 浅石雄次郎 (同 科学技術研究部長)        |
|      | 同 吉富庸四郎 (同 教育工学研究室長)        |
|      | 同 内田 鉄雄 (同 理科研究室長)          |
| 幹 事  | 各研究機関専任者                    |
| 会計監査 | 戸部 四郎 (大潟村教育研究所)            |
|      | 同 小笠原清忠 (男鹿市理科教育センター)       |
| 事務局  | 秋田県教育センター担当、高橋富美雄、藤井 信、草薨 稔 |

### ○教育研究所部会

当部会は、鹿角市、鷹巣町、阿仁町、上小阿仁村、森吉町、本荘市、東由利町、大潟村、大曲市、協和町、県教育センターの11機関で構成している。

「教育研究所・センターだより」5号・6号の発行をし、研究所相互の連携を強化する一方、地域の相互理解を深めるための地域研修会を阿仁地区、大潟地区を対象に実施、また、共同研究を実施し、明年2月に研究発表を予定している。

### ○理科教育センター部会

当部会は、鹿角市、鷹巣町、男鹿市、本荘市、大曲市、横手市、湯沢市、県教育センターの8機関である。

第1回分科会に引き続き、7月14日に第2回の分科会を計画し、中学校の新教材である土壌動物や細菌を調べるための実験器具の製作、検出、同定法及び野外学習やセット教材の取り扱い等について研究協議することになっている。今後、地区理科教育センターの研修事業に積極的に協力し、理科学習の充実に努めたい。

## 新しい機構と陣容で……

— 昭和55年度末人事異動と  
特殊教育センターの発足 —

昨年、10周年の祝いをしたばかりの本センターは、11年目に入って、かなり大きな変動があった。

人事の面では、所長以下10名の所員を送り（研究員を含む）、新たに14人を迎え、さらに5月1日には16人の研修員が県内各校から入所した外に、臨時的職員若手の方々が3人入り、所内に一層の活力がみなぎっている。

ことに、新しく特殊教育センターが条例によって設置され、当センターの北西に延べ1,326.56㎡の白い建物が完成したことは、特筆される。

## ※※※※ 人 事 異 動 ※※※※

## 所 員

## 〈転出〉

所 長 佐藤 久 秋田北高等学校長へ  
庶務係長 熊谷 善一 寺内青年の家経理係主査兼経理係長へ

## 技術家庭研究室長

越後 市朗 秋田工業高等学校機械科長へ  
指導主事 熊谷 幸正 生保内小学校教頭へ  
〃 野口 晴子 義務教育課指導主事へ

（特殊教育センター関係）

## 教育研究部長

向山 清 特殊教育センター特殊教育研究部長へ

## 教育相談室長

木村 志義 特殊教育センター教育相談室長へ

指導主事 山田 芳男 特殊教育センター指導主事へ  
〃 藤村 政俊 〃

## 〈退職〉

指導主事 野尻 ヤウ

## 〈転入〉

所 長 荒谷 浩 生涯教育センター副所長から  
課長補佐 大和 進 福利課主査兼厚生係長から

## 教育研究部長

渋谷孝一郎 平鹿高等学校教頭から

## 科学技術研究部長

浅石雄次郎 秋田東高等学校教頭から

指導主事 島山 陽一 秋田西中学校教諭から

## 告知板

その仕事の内容は、特殊教育に関する調査研究、職員の研修、心身に障害のある子どもたちの相談や指導にあたることになる。前記の職員異動も、特殊教育センター関係所員を含んでいるのであって、運営にあたっては、生徒指導、進路指導、幼児教育、教育相談等を含んでおり、教育センターと一心同体の連携を強めたい。

こうした新陣容により、今年度114講座と多くの随時を含む研修、所員の20テーマ以上の研究、昨年度3,000回を越した相談活動が始動したのである。

指導主事 倉泉喜久雄 秋田工業高等学校教諭から  
〃 小松 玲子 西仙北高等学校教諭から  
〃 中山 翠 仙北中学校教諭から  
（特殊教育センター関係）

指導主事 品川 大 義務教育課指導主事から  
〈所内〉

## 理科研究室長

内田 鉄雄 教育センター指導主事から  
技術家庭研究室長  
小玉 康夫 〃

## 研究員

## 〈転出〉

## 教科研究室

飯泉 尚弘 湯沢北中学校教諭へ  
教育相談研究室  
出川長五郎 鷹巣中学校教諭へ  
木村ひな子 特殊教育センターへ

## 〈転入〉

## 教科研究室

工藤 周一 外旭川中学校教諭から  
（特殊教育センター関係）

教育相談室 田山 久 大館第一中学校教諭から  
草薨 稔 仙北中学校教諭から  
高橋 恒治 花館小学校教諭から  
西山登喜雄 秋田養護学校教諭から

## 教育センターだより 第27号

発行年月日 昭和56年6月5日  
編集発行者 秋田県教育センター  
秋田市仁井田緑町4番2号